

真鶴岬で捕獲されたゴマフアザラシについて

中村一恵・山口佳秀

On the Ice-breeding Harbour Seal (*Phoca largha*) Caught off
Manazuru-misaki, Kanagawa Prefecture

Kazue NAKAMURA and Yoshihide YAMAGUCHI

1986年6月24日、神奈川県真鶴岬沖でアザラシが捕獲された。アザラシ類は、日本では北海道のオホーツク海沿岸以北に分布する寒流系の生物で、北海道を除く日本沿岸に南下することはまれである。これまで相模湾から正式に報告されたことはないようである。よって本例を報告し、あわせて東海域への鰭脚類の南下現象についても概報する。

報告するにあたり、貴重な資料をご寄贈下さった斉藤英和氏、捕獲情報をお寄せ下さった県水産試験場相模湾支所および横浜国立大鈴木博教授、南下鰭脚類の新聞情報を集めて下さった吉村信紀氏、斉藤雄治氏、記録の問合せに心よく回答下さった大洗水族館海獣展示課の稲葉暢弘氏、静岡水試伊東分場の青山雅俊氏、アザラシ南下の背景を探るにあたって有意義な助言と文献の提供を下さった神奈川県水産試験場の岩田静夫博士と同県水産課亀井正法主査、解剖処理で援助下さった小林峯生氏、以上の方々すべてに対し厚くお礼申し上げます。

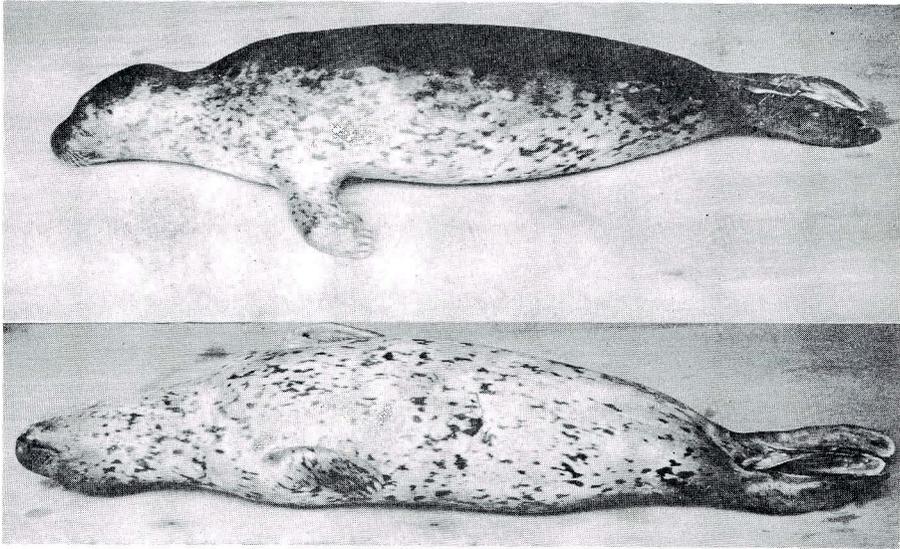
真鶴産個体および1986年に南下したアザラシ類の記録について

このアザラシは真鶴岬番場浦の小型定置網(斉藤英和氏所有)で混獲された。中層定置網の魚捕部分に入ったものが、斉藤氏によって早朝(5時30分頃)に見されたが、その時はすでに死亡していた。窒息死したものと思われる。斉藤氏によると、6月23日の夕刻から夜半にかけて網に入ったのではないかという。体長101.5cm、尾長11.0cm、体重31kgの雄で、大きさ(NAITO, 1976参照)から、1才程度の若令個体と推定された。

日本沿岸(北海道を除く)に南下するアザラシ類は、ワモンアザラシ、ゴマフアザラシ、アゴヒゲアザラシの3種である(NAITO, 1976)が、大きさ、斑紋等の特徴で類似するのは、ワモンアザラシとゴマフアザラシである。ワモンアザラシの腹面には、西脇(1965)によると、ゴマフアザラシにあるような顕著なまだら模様はなく、体側および背の斑紋はゴマフアザラシのものより大きく、多くの個体で斑紋の縁に白色を帯びる縁どりがあり、輪の形をなす。この個体は、ワモンアザラシの特徴とは異なり、灰色の地に白と黒の不規則な小斑が全身にある(写真参照)。斑紋の特徴から、ゴマフアザラシ(*Phoca largha*)と考えられる。本個体の骨格標本も収集してあるので、将来、頭骨に基づく同定の再検索および年令査定が可能である。

真鶴岬沖でゴマフアザラシが捕獲された年(1986年)は、相模湾以外の数ヶ所でもアザラシもしくはアザラシ様動物が捕獲されたり目撃された。これらは次の通りである(種名等は新聞発表等のニュースソースのまま)。

1. ワモンアザラシ 1月23日、愛知県豊橋市寺沢町(通称寺沢海岸)、体長60cm、体重8.5kg(朝日新聞、中部読売新聞各1月24日付)
2. アゴヒゲアザラシ 8月3日、長崎県対馬三浦湾、雑魚磯建網混獲、体長115cm、体重102kg、おそらく当才獣(鯨研通信364号)
3. アザラシ様動物 8月8日、東京都足立区南鹿浜町荒川、体重約100cm(サンケイ新聞、8月9日付)
4. アゴヒゲアザラシ 9月30日、茨城県水戸市那珂川、サケ流網混獲、体長135cm、体重80kgの雌(N



真鶴岬沖で捕獲されたゴマアザラシ（撮影・中村一恵）

HK10月3日ニュース、性・体長・体重は大洗水族館稲葉暢弘氏による。同館に保護收容)。おそらく当才獣。

日本産アザラシの分類と分布および南下種の分散について

日本で記録されるアザラシ類を主として内藤(1979)の分類によって整理すると、以下の5種である。

1. クラカケアザラシ *Phoca fasciata*
ベーリング海からオホーツク海にかけて分布し、流水とともに北海道近海まで南下する。
2. ワモンアザラシ (旧名 フィリアアザラシ) *Phoca hispida*
北半球両大洋の、多くは北極圏の定着氷上で繁殖し、流水とともに北海道のオホーツク海沿岸にも出現する。日本近海のものゝ亜種 *ochotensis* とされる。アザラシ科中の最小種。
3. ゼニガタアザラシ *Phoca vitulina*
北半球両大洋の寒帯から温帯の沿岸に分布。北海道東部の岩礁帯に繁殖するものは亜種 *stegnegeri* と位置づけられている。次の氷上繁殖型のゴマファアザラシに近縁で、岩礁海岸に定住する陸岸繁殖型の“ゴマファアザラシ”。
4. ゴマファアザラシ *Phoca largha*
北太平洋に分布し、流水とともに北海道沿岸に出現する。
5. アゴヒゲアザラシ *Erignathus barbatus*

北半球の北極圏に分布し、流水期に北海道近海でまれに観察される。北半球産アザラシ類中の最大種。

冒頭に述べたように、これら5種のうち、本州、四国、九州までに南下する種は、すべて氷上繁殖種の、ワモン、ゴマフ、アゴヒゲの3種のみで、南下個体のほとんどが幼獣である(NAITO, 1976)。西脇・内藤(1974)、NAITO (1976)、内藤(1979)に基づいてゴマファアザラシ幼獣の誕生から分散までに至る過程をまとめると次のようになる。

オホーツク海のゴマフは、沖合の流水域と沿岸域の2つの生活環境をもつ。流水域の生活は1月から4月までで、オホーツク海のものはこの間(3月頃)に流水上で1仔を出産する。生まれたばかりの仔は、体長約80cm、体重7kgほど。育仔期間は非常に短く、2~3週間。この間の仔の成長は目ざましく、とくに体重は25~30kgになり、この頃になると、遊泳生活に適さない新生仔毛を脱落させ、親と同じ羊毛状の毛がはえる。仔が独立すると、親はすぐに交尾を行なう。海水の解けはじめる4~5月には、20~100頭の集団となって沿岸に向けて移動するが、こうした流水域から沿岸域への生活環境の転換は、仔が生まれてまもなく行なわれる。この間に、仔は授乳、換毛、離乳までの過程を短い期間で完了させなければならない。そのため独立生活に入った幼獣には流水によって運ばれる分散が必然的に起きる。中には、風や潮流によって南へ移動する流水によって運ばれ、根室海峡(流水南

限域)を抜けて太平洋に流されて行く個体もあるだろう。海水が完全に流失する5月中旬以降から6月にかけて、根室半島周辺で魚網にかかるアザラシ類は、ワモン、ゴマフ、アゴヒゲ、クラカケの4種で、ゴマフが最も多く、次いでワモンとアゴヒゲ、クラカケは最も少ない。それらのほとんどが幼獣である。太平洋に流出する流水によって運ばれたものがさらに南の日本沿岸に達するものと考えられる。北海道を除く日本沿岸からのアザラシ類の捕獲例数は、1949年以降1975年までの間に16例あったが、出現頻度の最も高い種は、根室半島で魚網にかかる優占種と同じゴマフであり、16例中10例を占める。南下したアザラシ類の75%が4月から7月の間に記録されている。定住性の強い、陸岸繁殖種のゼニガタアザラシは南下しない。クラカケは水上繁殖種だが、日本沿岸(北海道を除く)への南下記録は一例もない。それは、この種が繁殖および換毛期を除くと明らかに外洋性となることに関係しているらしい。

アザラシが南下した1986年春の相模湾の海況

県水産試験場の相模湾漁海況予測(1986年6月20日付)によると、この年の親潮の勢力は、84年以来2年ぶりの強さを示し、2月中旬には鹿島灘北部海域まで親潮が南下した。その後も南下勢力は弱まらず、常盤～鹿島灘では3月以降の水温が平年に比べ4度も低かった。3月7日以降冷水塊は房総沖まで移動し、4月11日以降房総沿岸低温水の南下勢力が強くなり、湾内はその影響を受けはじめた。5月以降も前月に引続き冷水塊と房総沿岸低温水の影響を強く受け、平年に比

べ1～2度低い15度台の低温水でおおわれた。5月下旬～6月上旬には平年に比べ3～5度低い異常ともいえる低温が小田原の早川沖(45m深)で観測された。

この間(1～6月)、サケ、ホッケ、スケソウ、クロソイ等の寒流系魚類が湾内および東京湾口で捕獲された(東海水産研究所, 1986)。

考 察

表1に筆者らの知り得た、近年の東海域における鰭脚類の出現状況を示す。オットセイの記録が多く、アザラシ類の報告例は少ない。セイウチの出現は極めて異例のことである。

オットセイの南下は親潮接岸分枝と沖合分枝の道東沖や三陸沖への接近と一致するが、その分布南限は黒潮との拮抗状態によって変化し、春に大冷水塊が常盤沖にあるようなときには、分布は最も南偏し、銚子沖まで達する。水温15度は、オットセイの正常な体温調節を、そして活動的な生活を営むための限界温度と考えられる。潮境に集中する餌動物の分布密度にも関係するが、15度以上の高温水域まではほとんど回遊しない(和田, 1969)。

常盤沖より鹿島灘に至る沿岸域は、通常は北部に親潮接岸分枝の先端と黒潮本流から派生し、接岸分枝を分断する暖水舌ないし暖水流との混合域で、親潮接岸分枝が房総沖まで及ぶことはまれである(藤森・他1969)。したがって、オットセイが銚子沖まで達することは、和田が言うように、通常ではないことであり、さらに以南の東海域まで達することはまれなことであると考えられる。それ故に、こうした南下の背景

表1 東海域(房総～熊野灘)における鰭脚類の出現状況(未完)

年	月	房総(銚子以南)～相模灘	伊勢湾～熊野灘	出典
• 1975	3～4	伊豆大島沖 F 1 ?	三重御座海岸 F 1	木幡・亀井(1981), 毎日新聞('84. 3. 2)
1976				
• 1977	9	千葉天津 S 1		NAITO(1979)
1978				
1979				
1980				
• 1981	5	東京湾 F 1		毎日新聞('81. 5. 20), 朝日('81. 5. 29)
1982				
1983	12	千葉一宮 F 1		無名子(1984)
• 1984	1～3		三重津市 F 1, 名古屋新川 F 1, 三重尾鷲湾 W 1	塚田(1984), 毎日新聞('84. 3. 5)
1985	2	静岡伊豆山沖 F 1		東海区水研(1985), 青山雅俊(私信)

F; オットセイ, S; アザラシ(アゴヒゲ), W; セイウチ, 記号の後の数字は頭数,
•印は冷水年であった年(二平 1986)を示す

には、当然親潮南下勢力強さが関係しているものと考えられる。

異常冷年とされた1963年と同等もしくはそれ以上のTの値(鹿島灘沿岸のほぼ中央部に設定された定点観測地における10m層水温値のうち10°C以下の水温値(t)をとりだし10-t値の積算値 $T = \sum(10 - t)$ を冷年の評価指標とした場合)を示す年は、1975, 77, 81, 84年である(二平, 1986)。こうした「冷年」といわれる年に対応してオットセイが東海域に出現している(表1参照)。

銚子以南へのオットセイの南下は、12~5月の冬から春先にかけて起きるようであるが、アザラシ類の出現季節は、NAITO(1976)によると、オットセイと異なり、主として春から夏にかけてである。それによると、アザラシ類は、房総半島と能登半島を結ぶ線以北の北部本州では、4月下旬から10月中旬まで、その多くが4月上旬から6月中旬までの間に捕獲され、以南の南部本州、四国、九州では、そのすべてが7月上旬から11月上旬までの間に捕獲されている。12月から3月までの記録は皆無である。捕獲の位置と季節の関係において、水戸市(9月30日)、真鶴(6月24日)、対馬(8月3日)の記録に無理はないが、豊橋市(1月23日)の出現季節は、どうみても不自然である。新聞報道によると、体長60cm、体重8.5kgとあるから当才獣と推定される。しかも、その写真を見ると、新生仔毛を脱落中の個体であるようにみえる。上記3例が混獲によるものであるのに対し、この個体は海岸の砂浜にうづくまっていたという。自然分布とは考えにくく、北方の繁殖地から、おそらく船によって人為的に運ばれ遺棄されたものであろう。

相模湾へのゴマフアザラシの出現は、神奈川水試いうところの房総低温水の波及に伴った迷入と一応考えてよいのではないかと思えるのだが、移動力が大きくかつ外洋性に富むオットセイと沿岸性のアザラシ類とは、出現時期に違いがあるようであり、同一視することに問題が残る。今後の検討を必要とする。

おわりに

1986年6月に相模湾でゴマフアザラシが記録された。こうした1例報告はそれほど大きな意味をもたないかもしれない。しかし、情報が集積されることによって、一つ一つの情報が互いに補完しあう形となり、予想外の事実や法則性が浮かび上がってくるのではないだろうか。だが、これらに関する情報網は極めて貧弱

で、断片的なまま放置されているのが実状である。しかし幸いなことに、鯨類研究所がセンターとなって情報収集に乗り出した(加藤, 1986)。ただし、情報の中で、新聞によるものは、豊橋市の例にみるように、速報性はあっても、由来その他同等の点で信憑性を往々にして欠く場合もあるので、資料の扱いには十分配慮する必要があることは言うまでもない。

文 献

- 藤森 完・平野敏行・上原 進 1969 関東近海の海流系・水塊分布の変動およびその特性、「冷水塊の水産資源の分布・消長に及ぼす影響に関する研究」pp. 14-38, 農林水産技術会議事務局, 東京。
- 加藤秀弘 1986 ストランディング・レコード1. 鯨研通信(364): 50.
- 木幡 孜・亀井正法 1981 大冷水塊消滅に伴う特異海況と相模湾における珍種の捕獲記録. 水産海洋研究会報, 39: 128-130.
- NAITO, Y. 1976 The occurrence of the phocid seals along the coast of Japan and possible dispersal of pups. Sci. Rep. Whales Res. Inst., (28): 175-185.
- NAITO, Y. 1979 A record of the bearded seal wandering with special reference to the wandering speed. Sci. Rep. Whales Res. Inst., (31): 121-123.
- 内藤端彦 1979 アザラシ類の水生適応と繁殖適応. 海洋と生物, 2 (1): 2-8.
- 二平 章 1986 シンポジウム「水産海洋」異常海況と漁況, 2 異常海況(3) 親潮流域, 水産海洋研究会報. 50: 132-137.
- 西脇昌治 1965 鯨類・鯨脚類. 東京大学出版会
- 西脇昌治・内藤端彦 1974 ゴマフアザラシ, アニマルライフ第2版, pp. 1610-1616. 日本メーブル・オーダー社.
- 塚田 修 1984 1984年に三重県で記録された北方系生物. 三重動物学会々報, (7): 57-59.
- 東海区水産研究所 1986 長期漁海況予報, 東海区. (66): 28-29.
- 和田一雄 1969 三陸沖のオットセイの回遊について 東海区水研報, (58): 19-33.
- 無名子 1984 一宮海岸で保護されたオットセイ. さかまた, (23): 6, 鴨川シーワールド.